

ガビン先生と楽しむための
古典文学講座

『古典文学から見える昔の生活』

十巻と十一巻



〜と〜

伊藤 雅之



令和四年六月十五日(水)

東京大学総合教育センターにて

十時から十時三十分まで



清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

清言校字

日暮れ ↓ 宵 ↓ 夜中

上代 **あかとき**

万葉集 五更 鶏鳴
あかとき

あかつき

中古

(曉) 夜半から夜の明けるまでの時間の推移
夜深の刻限、夜明け、明け方、まだ暗い頃

☆通い婚…男が女の家から出る

別れて帰る刻限 「あかときの別れ」 「きぬぎぬの別れ」
後朝 衣衣

しのめ

(東雲)

東の空が明るくなる頃 明けの一步手前
夜明け前の薄明かり (茜色に染まる空)

※篠の目 住居の壁等に細い網目 材料は篠竹

あけぼの

(曙) 明仄

日の出前 物が見分けられる頃
空が薄明るくなる頃 夜明け頃

あさぼらけ

視覚的な明るさ ほのぼのと明ける頃
あけぼのより明るくなった頃

つとめて

夙に…漢文調
(夙) 早朝 夜明けから間もない頃
夙々つっしんで仕事を始める…宮廷の仕事が始まる時刻

あさ、あした…夜が明けてから まもなく、しばらくの間…昼頃まで

(あさあけ) 朝明
(あさけ) あかとき
あかとき
朝に近い

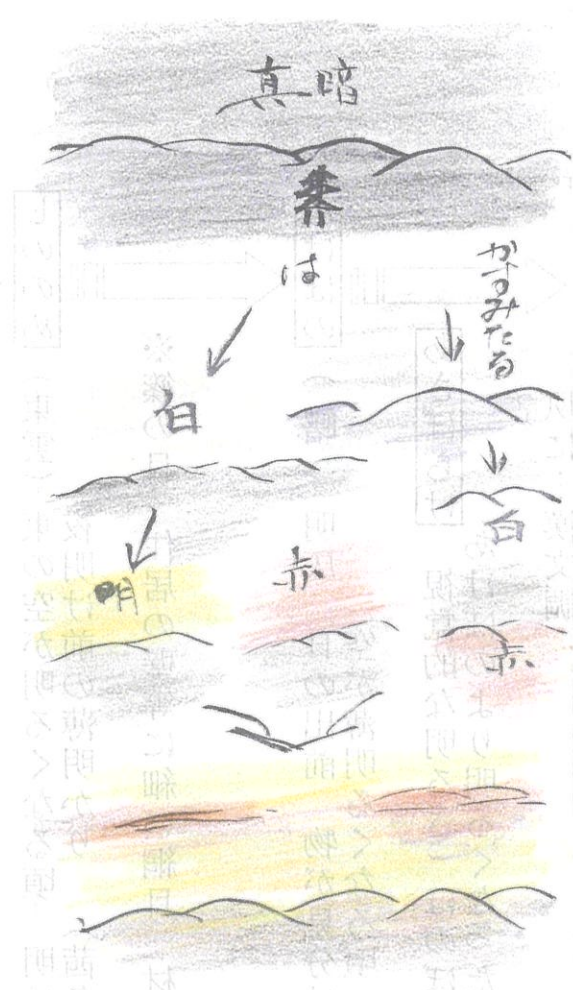
「枕草子」

堀本 春はあけぼのの空 いたくかすみたるに やうやうしろくなりゆく

前田家本 春はあけぼの 空はいたくかすみたるに やうやうしろくなりゆく

三卷本 春はあけぼの やうやうしろくなりゆく

伝能因本 春はあけぼの やうやうしろくなりゆく



京都 東山の夜明け

堀本 山のはの すこしづつあかみて むらさきだちたる雲の ほそくたなびきたるも いとおかし

前田家本 山ぎはの すこしづつあかみて むらさきだちたる雲の ほそくたなびきたる

三卷本 山ぎは すこし あかりて むらさきだちたる雲の ほそくたなびきたる

伝能因本 山ぎは すこし あかりて むらさきだちたる雲の ほそくたなびきたる

堺本

前田家本

三卷本

伝能因本

夏は夜 月のころはさらなり やみもなをほたる おほくとびちがひたる ただひとつふたつなど

夏は夜 月のころはさらなり やみも ほたるのほそくとびちがひたるまたただひとつふたつなど

夏は夜 月のころはさらなり やみもなほほたるのおほくとびちがひたるまたただひとつふたつなど

夏は夜 月のころはさらなり やみもなほほたる とびちがひたる

十三夜

十五夜、望月

中秋の名月
管弦、歌、酒宴

十六夜

堺本

前田家本

三卷本

伝能因本

ほのかにうちひかりてゆくもいとおかしあめほのかのどやかにふりたるさへこそおかしけれ

ほのかにうちひかりてゆくも おかしあめなどのさへふりたるさへこそおかし

ほのかにうちひかりてゆくも おかしあめなどをかしてあめなどの降さるるさへこそおかし

ほのかにうちひかりてゆくも おかしあめなどをかしてあめなどのさへふりたるさへこそおかし

堺本	秋はゆふぐれ	ゆふ日のきはやかにさして	山のは	ちかくなりたるに	からすの
前田家本	秋はゆふぐれ	ゆふ日のきはやかにさして	山のはいとちかくなりたるに	からすの	
三巻本	秋はゆふぐれ	ゆふ日の	さして	山のはいとちかうなりたるに	からすの
伝能因本	秋はゆふぐれ	ゆふ日	はなやかにさして	山のはいとちかくなりたるに	からすの
堺本	ね	に行	とて	三つ四つ二つ三つなど	とびい
前田家本	ね	にゆく	とて	三つ四つ二つ三つなど	飛びい
三巻本	ね	どころへ行	とて	三つ四つ二つ三つなど	とびい
伝能因本	ね	どころへ行	とて	三つ四つ二つ	など
堺本	かり	のおほくとびつれ	たる	いとちいさくみゆるは	いとおかし
前田家本	かり	などの	つらねたるが	いとちいさく見ゆる	をかし
三巻本	雁	などの	つらねたるが	いとちいさくみゆるは	いとをかし
伝能因本	雁	などの	つらねたるが	いとちいさくみゆる	いとをかし
堺本	日	いりはてて後	風のをと	むしのこゑなどは	いふべきにもあらず
前田家本	日	の入りはてて	風のをと	むしのね	など
三巻本	日	入りはてて	風のをと	むしのね	など
伝能因本	日	いりはてて	風の音	むしのね	など

堺本	冬はつとめて	雪のふりたるにはさらにも	いはず	霜	のいとしろきも	さらねど
前田家本	冬はつとめて	雪の降りたる	はいふべき	ならず	霜などのいと白く	またさらでも
三巻本	冬はつとめて	雪のふりたる	はいふべきにも	あらず	霜	のいとしろきも
伝能因本	冬はつとめて	雪のふりたる	はいふべきにも	あらず	霜などのいとしろく	またさらでも
堺本	いとさむきに	火なんどいそぎおこして	すみ	もて	ありきなど	する見るも
前田家本	いとさむきに	火な	どいそぎおこし	すみ	なども	わたるも
三巻本	いとさむきに	火な	どいそぎおこして	すみ	もて	わたるも
伝能因本	いとさむきに	火な	どいそぎおこして	すみ	もて	わたるも
堺本	ひるになりぬれば	やうやうぬるなく	ゆるびもて	いき	て	ゆきもきえ
前田家本	ひるになり	て	やうやうぬる	く	ゆるびもて	ゆけば
三巻本	ひるになり	て	ぬる	く	ゆるびもて	ゆけば
伝能因本	ひるになり	て	ぬる	く	ゆるびもて	ゆけば
堺本	すびつ	火をけのひも	しろき	はいがちに	なりぬれば	わるし
前田家本	すびつ	火をけ	も	しろき	はいがちに	きえなりぬるは
三巻本		火をけのひも	しろき	はいがちに	なり	て
伝能因本	すびつ	火をけのひも	しろき	はいがちに	なりぬるは	わるし

1674(延宝2)5

加藤磐齋
「枕草紙抄」

底本
伝能因本

「やうやうしろく
やうやうと云也」

此初段は一部の大綱なれば先發端にあめつちの運動^ゴ、四季の氣色にもとづみて人事の
動靜^ゴ七情の分別をすむまで述べをしめる文也。就中此一段を四節に見るべし。いはゆる
「春夏秋冬也」の分^ゴおのづからしれやすし。尤分體といひ心とやんごとなき段也。
「春はあけぼの」天氣と四季との初をいふ。陰中の陽氣なれば其根ざしよりをしもとづけて
書出す心尤ふかし。天氣と四季との初をたつきけし。きは混沌の氣ひらき初るよそほひとかく
わかたぬ所にもとづみて一部の初をたつきけし。たとえば混沌ひらかぬ已前は人物山川等もなく
既にひらけてより品々の物を天地の間に屈伸^ゴとこごとく此の書も春の曙のおぐるき位より云
出し初て次第にあらゆる事を一部に伸顯^ゴとす也。皆あめつちのことはり四季の氣色などに
付ておしへをたつる所と見るべし。陽氣はすゝむものにてのびんとすれども餘陰などをしたふ時なれば

「なりゆく山ぎは」
「あけがたなればなを陰分をおびたる時分にて立のぼる雲も正色にあらぬ也」
「むらさき」は黒色が赤色つゝみため色也。雲も陰中の賜物也。此取あひの氣色おもひやるべし
「ほそくたなびきたる」とは春の時分なればすさまじき風は吹かねども餘雲の東風にすこし有。故それを
ふくめてほそくたなびくと云也

※伊藤参考 明治四十一年十一月八日発刊 室松岩雄「國文註釈全書」(國學院大学)

1674(延宝2)7

北村季吟
「枕草子春曙抄」

底本
伝能因本

まづ時節の景書出たり。爾雅云「春為青陽万物發生」(漢の初め 紀元前1000年頃の辞書)
春はよろづの物生ずる初めなれば發端に書け。此發端に春は曙を賞していへる少納言の
心あらはれて枕草子一部の形容もこもり侍るべし。
其次に夏は夜を賞したる。以下実にも春は曙といへる題を出され侍り。其の外歌にあまたよめり

此のち堀川百首、六百番歌合などにも春は曙といへる題を出され侍り。其の外歌にあまたよめり
弘恭云「此段尤も異同あり」今悉くいはんも煩はしければ其一二を挙るに
群書類従本、天文古鈔本等には「春はあけぼの」の空いたく霞たるに」の一句あり
「山ぎはすこしあかりて」を「山ぎはのすこしあかみて」と有もあり
「ほそくたなびきたる」の下「もいとをかし」又「などいとをかし」の一句そはりたるもあり。此所は則ち

をかしといふ一句をわざと省きたる文法とみてよければ原本に従いつ。以下も異同を挙ると挙ざるとあり。又
原本にあるも不用なるは削りつ。曙の雲のうす黒日影うつろひて紫の色めきたる也。
「むらさきだちたる雲の」

※伊藤参考 明治廿六年七月四日発刊 鈴木弘恭「増訂 枕草子春曙抄」(大正二年十二月発行)

やうやう白くなりゆく。

1916(大正5)

窪田空穂

「枕草紙評釈」

底本

伝能因本

評

「山ぎは少し明りて山の輪郭に添つた所の空だけが他の所に較べるとやや明るくなつて来て清少納言といふのは矛盾した節にも清少納言の好まぬ短く印象的なる。彼女が景色を自然に對しての感(さ)く、の感傷的な張点のみ、静かに語り出すと、瞬間の女は、自然を平面的に感ず、曙のひ夕暮ると言つて、風物の静かに語り出すと、瞬間の女は、自然を捉え、人事に對する趣味の普通の人、較べては、冬や異種な所を語り出して、彼女を感ずる。

1820(文政12)

岩崎美隆

「枕草子扛圖抄」

底本

伝能因本

※

「春曙抄」に書き入れしている

「山ぎは」峰なり
「あかりて」あかくなりたる也 春曙抄伝、一説「上り」也
狭衣に、空はあまりはれわたりて、ほのぼのと明ゆく山ぎは
「ほそくたなびきたる」春の曙なれどおかしき云々

1681(天和元)

岡西惟中

「枕草紙旁註」

底本

伝能因本

筆法和漢心のかたひたる奇の事也 此草紙の文章の明らかなるをみるべき也 殊には山川土地鳥獸草木よろづもの名おほやけ
おほくせす だ此草紙の文章の明らかなるをみるべき也 殊には山川土地鳥獸草木よろづもの名おほやけ
わたくしの故實をらしむるさうしなればその事その物を明らむべき也

「山ぎは」峰の事也 一説上はあらす
「あかりて」明りて也 一説上はあらす
「鑿鑿」ツツツの二字
○是は序分の様に四季折々のおもしろきありさまを書きたり草紙ものがたり等の一體也
紀貫之が古今の序源氏まぼろしの巻 雅尚齋ツツツが詞東坡が四時序 晋の淵明が四時の詩
近くはつれづれ草の十九段 皆四季の風景を筆にまかせて各ころやり侍る也 儲ぎ天地
一元の春の景氣 ことに「あけぼの」を賞する事 古今の詩賦文章をかぞふるにいとまあらす
あけぼのの白くと書し白の字はかの蘇子瞻ツツツが前 赤壁の賦に「不知東方之既白」と書きたる



1919(大正8)

永井一孝

「枕草紙新釈」

底本
伝能因本

「あけぼの」の下には「をかし」といふ語を省いてゐる。春は明け方が面白いといふなほ此一段には所々に「をかし」を省いてゐる。例えば「補足たなびきたる」：「紫だちたる雲」紫がかつた雲
こゝいふ紫は今いふ江戸紫の色ではなく濃い赤色に近い色をいつたのである
「たなびきたる」「た」は接頭辞、なびくは靡くで、長く引く、の意
通常「棚引く」と書くのは全く當字で、棚の如く引くの義ではない

1921(大正10) 6

金子元臣

「枕草紙評釈」

底本
伝能因本

「春は曙」春の頃は、一日の中にては、曙が最も面白しと也。「曙」の下、をかしを略けり。「をかし」興あるをいふ。面白しと同じ。
「しろくなりゆく山ぎは」ハツキリしてくる山際がとなり、夜の明けて、山の輪郭の明になるをいふ。「しろく」は著くの意なり。諸註、白く解けるも聞えぬにはあらねど、甚だ明確を欠く。又「しろくなゆく」にて、句を切る説もあれど、さては、何が白くなりゆくにか。主格不明なり。夜がといふ主語を補へば聞ゆれど、本文のままにて、その意の通ずるは及がじ。「あかりて」明りてとなり。赤らんでくるをいふ。
「紫だちたる」紫は、今いふ紫よりは赤味勝にて、所謂古代紫なり。明け方の雲にはよく見ゆる色なり。「だち」はその気の発つをいふ意の接尾語。
「棚引きたるがをかしと也」「たなびく」は靡くと同じ。「た」は接頭語。

評「たなびきたる」

前略

四季の風物に對しての好悪は、甚だ複雑な聯感が伴うものであるが、直覚的には、皮膚の刺激に本づくことが、その大部分であるから、春秋二季は、ことに快的な時節と認められ、つひにこの二季の優劣は、人々の口頭語となり、詞人がその才藻をきそふ好題目となつた。

平安朝に貫之が「錦をはれる秋の木の葉」孝標の女が「おぼろに見ゆる春の月」など、或いは春に肩を入れたり或は秋に心を寄せたりして、彫心鏤骨詩壇の一佳典を作るやうになつた。

やわらかい輪郭をつくつた東山の峯に、ほのぼのと別れてゆく横雲の空は、京生まれの清少が幼少から見慣れて、印象ふかく感じた景色であらう。

1931(昭和6)
関根 正直
「枕冊子集註」

底本
伝能因本

「春はあけぼの」補 此の一句、下に下につけて読むべからず。春の景色は、曙をよしとす、の
意なれば、ここに句を切るべし。下の、夏はよる、秋はゆふぐれ。などのあるに比べて
思いたる霞みたるに補 此の一句、春本抄本等大かたの書になし。唯加藤千蔭、前田夏蔭
の二翁、古本によりて補 此の一句、次の句、やうやう白くなりゆく云々といへるは、先づ
空のいたく霞たると、次第に白くなりゆく程になりて、山際の赤みたる由
にて、此の句のある方、文意明かに聞ゆればなり。日出づる程になりて、山際の赤みたる由
「山ぎは」補 清水濱巨翁の校本には山のはとあり。いづれにしても聞ゆ。夕日の、山陰に
入らむとし、清の山端近くなりたるなり。

1931(昭和6)
田中重太郎
「枕冊子新註」

底本
前田家本

「春はあけぼの」そのあけぼのに生命を見出す 「春はあけぼの(いと)をかし」の省略せられた語法
「あけぼの」はあかつきにつづく時刻で明けゆく頃
「空はいたく霞たると」塚本にはあるが三卷本・伝能因本にはない
「すこしづゝあかみて」三卷本・伝能因本「すこしづゝあかりて」

1928(昭和3)
松平 静
「枕冊子詳解」

底本
伝能因本

「紫だちたる雲の細く棚引きたる」補 其光の雲に映じて紫色したるが棚引きたる様をいふ。
「春はあけぼの」とは、春は曙の景色が、いともすぐれて、をかし、といふ心なり。ここにて
句を切るべし。『それは清少納言が筆法にて、常に用ふる省略法なり。凡て省略法を用いた時は
文をして冗長、散漫に流るる弊なからしめて、却て餘情津々として湧き來らしむる者鳴れば
なり。清少納言の文、奇警、清新など稱せらるる所以は、全くここにあるなり。さて此の次
は、その面白き様を断るなり。以下、夏秋冬、共に同じ筆法と知るべし。』
「やうやう白くなりゆく山ぎは少しあかりて」やうやうは、漸漸なり。「白くなりゆく」は
空の白み行きて將にあけなんとする景色をいふ。「山ぎは」は、山際にて、空の山に近づき
接したる如く見ゆるあたりをいふ。「少しあかりて」は、少し明るくなりてなり。
「紫だちたる雲の細く棚引きたる」とは、太陽が將に上がらむとして、其光の雲に映じて紫色したるが棚引きたる様をいふ。

底本
三巻本

「あけぼの」は、夜のほのぼのと明けそめるころをいう。「暁」の語が、夜のまだ明けしまらぬ時分を意味するのに比べて、時間的に少しおくれたころをさす。

「やうやう」しだいに、だんだんの意。
「白く」著く(しるく)はつきりした状態。際だった状態(の意とする説がある。しかし「白くなりゆく」は、白んでゆく意で、「白」という色の感覚を根底にして解釈するのがよい。

「白くなりゆく」ここに句点を打って、文を切る説がある。これに従えば次に「主語」をかし(述語)と補って見るべきで、捨てがたい解釈ではあるが、しばらく通説どおり以下の「山」

「山ぎは」「山」と「空」との接触するところであるが、視野は空の方に広がっている場合という語である。あとの「山の端」の語が、やはり山と空との境界線をさしながら山に視点を置いておられるのと対する。「山ぎは」は空の山に接するあたり、「山の端」は山の空に接するところ、と考えたらよい。

「あかりて」前田本・堺本には「あかみて」とあつて、「赤みて」赤らんでの意味に解せられるが、「赤む」の語は自動詞四段階活用・他動詞下二段階活用、ともに冬至の用例では、顔色についていうのが普通のようにであるから、ここは「あかりて」の本文が正しいとすべきであろう。しかし「あかり」はラ行四段階活用動詞の連用形であるが、平安時代の文献には、ここ以外にその用例は見つからず、したがって、ここも「あがりて」(上の方に位置して)とする説がある。原行の通説としては「あかりて」と読んでいるが、解釈上は、なお「赤りて」(赤らんで)と「明かりて」(明るくなつて)との二説が対立する。だんだんしらんでゆく山ぎわが少し光を加えてきた趣で、「明かりて」の意で解したい。色の赤みは、次の「紫だつ」の語が表している。

「紫だちたる雲の」「紫だつ」は、紫色をおびる・紫がかかるの意。「だつ」はそういう状態になる意を表す接尾辞で、四段に活用する。「紫」は古代紫で、赤みの濃い物。当時の感覚から、もつとも高貴な色とされていた。「たる」は完了の助動詞「たり」の連体形。口語のテイル・タにあたる。「雲の」の「の」は格助詞で主語につくが、それは、この時代の文法では従属節の主語に限って用いられることを解釈上の重要な鍵として記憶しておかねばならない。

「たなびきたる」は主語「雲」に應ずる述語であり、完了の助動詞「たり」の連体形で文を終わっているのであるが、「紫だちたる」以下のこの文は、主語「紫」についた格助詞「の」によって示されているように従属節である。すなわち、次に「ながめ(主語)」をかし(述語)の全文が想定せられる。「やうやうしるくなりゆく山ぎは(主語)」すこしあかりて(述語)と「紫だちたる雲の(主語)」細くたなびきたる(述語)とは重文を構成し、その重文構造の文が従属節となつてゐる。しかし、それが続くべき次の主文がまつたく省略されて、結局は従属節だけで文としての表現を完結してゐるのである。「春はあけぼの」は名詞止め、これは連体形止めの文と言われるが、これが余情の深い文体として、枕冊子の表現の特徴を作り出していることについては、すでに述べたとおりである。

底本
伝能因本

「春はあけぼの」「あけぼの」は明け方。文法的に精確をきすれば、下に「をかし」などの語を補って解釈すべきである。しかし、文章の面白味からすればここばかりではなく、「たなびきたる」「夏は夜」「螢飛びちがひたる」等々、すべてボツと切って読むべきで、このボツ切れの所に興趣があるのである。一々「をかし」とか「面白し」とか「美し」とか「あはれなり」などと補ってその情趣を限定せず、それらを言外に含めている所に尽きさせぬ味わいがあるのである。が、解釈の立場からは、省略は当然補わなければならぬ。

「やうやう」「漸く」の音便。次第に。

「しろくなりゆく」「白く」「著く」二説あるが前者をとる。「なりゆく」で文を切る方が前述のいわゆるボツ切れの情緒に叶い、夜明けの空の白んでゆく様が見えるようであるが、通説は「山ぎは」につづけ、「しろく」を「著く」と解し、「だんだんハッキリしていく山の輪郭」と訳す。

「山ぎは」山の際といつても「山の端」が山の稜線を主にしているのに対し、「山際」はスカイライン（山に接する空の「帯」）のそば。山のそば。

「あかりて」「あかり」は「明る」（あかるくなるの意）の連用形の中止法。「て」は接続助詞。

「むらさきだちたる」「紫」は王朝貴族の理想の色彩で、今の紫よりややくすんだ赤味のかかった古代紫。いわゆる「茜さす紫」である。「だつ」は「ばむ」「めく」に近い接尾語で上の語を動詞化する。「たる」は完了の助動詞「たり」の連体形で、下の「雲」を修飾する。

「たなびきたる」「た」は「なびく」の接頭語。「たる」は前と同じ形だが、用法は全く異なる。これは連体止めと称する体型の特殊な用法の一種で、特に清少納言の好んで用いた表現形式であり、「雲のゝたる」のごとき形が多い。その文体的効果は、情景を空間的に結晶して知覚させるとともに、一種の感動語法として余情をただよわせるに適している。従ってこれは、単なる完了の「た」でなく、継続、進行の「ている」である。「の意で、その下に「をかし」が略されている。

清少納言が著眼筆致の人と変わって、奇警で、完勁で、軽妙で、のまた要点を浮かし出して読む者の心にありありと印象させる趣は、この巻頭の一部を見ても明らかである。

春の見所といえ、普通の人は桜の花盛りとか、霞棚引く野山の眺めとかいうところを思い浮かべるであろうが、清少納言が人の思ひもつかぬ所に、格を破って新しい観察を試みたのも面白く、しかもその書き方が、

春の現象の様に、普通の中からは、曙を選び出し、曙の景色の中から、段々白んでゆく処を選び、白んでゆく有様の狭く、精神的に特殊にと、ぼうつと明るく、紫の雲の細く棚引いたところを選び出し、広い所から、読者の心に静かに残した手際は感歎に値するものである。

1955(昭和30)11
金子元臣・橋宗利
「枕冊子新釈」

底本
伝能因本

「春は曙」春の頃は一日の中で曙が最も面白いとの意。「曙」の下「いとをかし」を略した。以下、夏・秋・冬も同様である。また「細くたなびきたる」の下にも「春はをかし」を略す。「をかし」趣のあること。面白いこと。
「しろく」趣のあること。面白く。面白く。面白く。「しろく」は、著く(しろく)の意にも取れるが、本書中で見ると、その意では二四段「しろし」四七段「しろき」二三七段「しろく」など明記してあり、「しろし」の用例は一つもないので、ここもやはり「白く」の意と見るのが妥当。
「あかりて」明かりて、即ち明るんでの意。
「紫だちたる」この紫は今いう紫よりは赤味勝ちで、いわゆる古代紫である。「だち」は、その気なたつをいう意の接尾語。四段二活用して上の語を動詞化する。
「たなびきたる」靡くと同じ意。「た」は接頭語。

1955(昭和30)4
塩田良平
「枕冊子評釈」

底本
三卷本

「春は曙」春は曙がをかし、と雑語省略。
「しろく」白く、著く、いずれにもとれるが、明暗二つに分かれんとする暁の明を意味する「白」よかろう。著く、なら、はつきりする意。
「山ぎは」山の輪郭。
「あかりて」ラ行四段の動詞。明るくなる意と、赤らむ意。いずれにもとれる。
「紫だちたる」古代紫。すなはち赤味の濃い紫色。「だつ」は体言その他の語について：らし
くある意をもつ動詞化の接尾語。
鑑賞 この段は季吟の「春曙抄」の名詞を引き出したほど、「枕草子」の重要部分で、開卷第一
にあるとともに、平安朝における四季と自然現象における壯観を、もつとも簡潔な筆法で散文詩的に書いたもの。
この形式は後世の文学にも大きな影響を与えている。
「中略」
「春は曙」しだいに白みがかかり、さらに赤みに変化し、最後に紫色に注目することによつて、敷居の変化に止めをさす。つまり紫という当時にあつても高貴な色への展開をもつて春の曙のめでたさを象徴させ
ている。明け方には「曙」すなわち「あかとき」という言葉があるが、これはたんに明るくなつたときという
意味で、季節らほかかわりはない。

◎平安時代の貴族の一日

開諸門鼓かいしよもんこ…日の出と共に天皇が住む御所の門が開く合図 *太鼓の音が鳴り響く

起床

- 起きると自分の星の名前を七回唱える（北斗七星占） ↓木火土金水十二支しちせいせん
- その日の自分の運勢を占う…もしダメだったら仕事は休み「理由は運勢が良くないから」
- 歯磨き…楊枝で磨く
- 西に向かつてお祈り 西の方角には極楽浄土がある 陰陽師の指示もあろう
- 日記を書く…昨日のことから今日の予定「御堂関白記」「小右記」「権記」

宮中での仕事には細かい決まり事がたくさんあったので引き継ぎにも使う
 ☆朝廷内の地位によって担当する仕事が違う
 ← 家柄によって仕事が違う…子孫に内容を伝える

- 朝食？強飯（蒸した御飯）湯漬けだけ + 雉肉、鶏卵
- 洗顔・爪切り・風呂 ↓風呂は蒸し風呂 5日に1回 体臭 香り付け || 香木
- 化粧…男女ともに白粉を塗る 暗くなっても相手がわかる

出勤 牛車で出勤 時速3km ゆっくりと進む

07:00

3~4時間

- 政務 莊園公領制
- 年間行事の計画、準備
- 節句（人日1/7、上巳3/3、端午5/5、七夕7/7、重陽9/9） 十五夜
- 天皇の御法会 ↓ 残業続き 夜中の1時〜2時まで会議

退勤

自宅にて

十二時に昼食

- 蹴鞠…出世のカギ うまく蹴る①相手の鞠を受け②高く上げ③渡す
- 和歌…結婚できるかどうかのカギ

十六時に夕食

- 双六、囲碁

10:00

18:00

就寝 冬

19:00

就寝 夏

暗くなったら寝る 外も内も真っ暗 灯りの火をつけるのは贅沢品 油に火

だ	ざ	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ぢ	じ	ゐ	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
づ	ず		る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
で	ぜ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	
ど	ぞ	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

(じ) ヲズイ (ゐ) ウイ (は) フア (し) スイ
 (ぢ) ソテイ (ゑ) ウエ (ひ) フイ (ち) テイ
 (づ) ソドウ (を) ウオ (へ) フェ (つ) トウ
 (え) イエ (ほ) フオ

話し言葉
= 書き言葉

↓

- 基本的に書かれているままに読む やうやう 「む」は「ん」
- 母音はしつかり発音する あいまいに発音しない
- 濁音の前は小さく「ん」と発音する まだ↓「まんだ」

た	な	び	きたる	く	もの	ほ	そ	く	む	ら	さ	き	だ	ち	たる	や	ま	ぎ	は	す	こ	し	あ	か	り	て	や	う	や	う	し	ろ	く	な	り	ゆ	く	は	る	は	あ	け	ぼ	の
		ビ				フ	オ						ダ					ギ	フ																									